

第一分科会まとめ

テーマ

「報恩教化の内容について」

小野文琰

役配

座長 吉本前教 木村勝行

発題 三田村竜全 近江幸正

運営 河崎俊栄 久住謙是

書記 小野文琰

資料

「報恩生活のすすめ」(三田村竜全)

「報恩思想―その意義と内容」(近江幸正)

「報恩のための教化活動をめざして」(石川

康明)

「七百遠忌特別布教教案」

九月七日(第一日)

まず発題者(近江)より「報恩思想―その意義と内容」をテキストにして、報恩精神の理念についての発表があった。その要旨は

① 仏教の「恩」思想は恩愛(我観に立つ恩)を止揚する真実恩(無我愛の恩)を根幹とする。

② 日蓮聖人の報恩思想は仏恩深重と一切衆生の恩を基調とされる点、道元・親鸞と同じであるか、彼等の恩思想が世俗的倫理観に対する超越性に主眼を置いたのに対し、聖人は超越の立場を踏まえながらも、さらにそれを社会生活の指導原理として打ち立てられた。

③ 日蓮聖人の報恩思想の特徴。報恩を人間の尊い感情の表われとして重視し、それを仏道への原動力と評価。仏恩の世間恩に対する優位を強調し、仏恩を基礎としてはじめて世間恩の真実も明されるところ。国恩については、国土の恩、生国の恩、

⑩ 礼を尊ぶ。

資料の内容について御意見をお聞かせ願いた

す。

問 「報恩生活のすすめ」の内容は一般的すぎな

いか。もう少し日蓮的色彩を出すべきである

問 十ヶ条の文章の中には非つけ加えてもらいた

ことがある。

(以後、三田村師の「報恩生活のすすめ」に載せられていた十ヶ条、六波羅密の表現や文章について意見が集中。運営より近い将来このようなテキストを出版する計画があるため、具体的な討論をお願いしたいとの要請があり、細かく検討され、数ヶ所訂正が確認されたが、更に明日までの課題とされた。)

テーマに対する自由討議(要略して記す)

- 儒教的な封建思想としての「恩」を超える報恩の理念が必要である。
- 現実には麻葉やロックに狂っている若者がいるのに、今までの論議は時代錯誤ではないか。恩の

理念の内容が現代版の教育勅語のような気がする

○ 「期待される人間像」的発想はとらない。

○ 「四恩抄」が報恩思想の基礎になるのではない

か。

○ 「四恩抄」の国主の恩をどのように理解するか。

○ 国主という考えに対する時代的な感覚も考えな

ければならない。

○ 国主に対する恩の報い方にある。宗祖が国主を

諫暁したことを問題にすべきである。

○ 国とは社会歴史的なもの、土とは自然的なもの、

一粒の米に感謝するとき、その一粒の米の中に国

土がある。

○ 現代における国家諫暁とは、歴史的現実を踏ま

えた上で現代における立正安国の精神を発揚する

ことである。

○ 現代、現代というが、時代によつて祖書を超え

てしまうような危険はないか。

○ 国家権力を問題にする必要はないのではないか。

○ 聖人の正法を立てることが立正安国である。

○ 現在の厳しい政治的社会的状況を無視して真の

立正安国はあり得ない。

。諫暁についてもっと具体的に話し合うべきである。

。周囲から国家まで通じなければならぬ。

。老人福祉、男女平等等の政治的アドバイスをすることもその第一歩ではないか。

。「恩」の問題が中心である。報恩の前に感恩がなければならぬ。恩を感じなければ報恩などできずはならない。

。感恩とは膚で感ずるものだ。

。縁起をつきつめると感恩にいきつく。

。生かされていると感ずるところが感恩のすべてである。

。日蓮教学から若者に感恩させるにはどのような説いたらよいか。

。宗務院の標語「道はひとすじ」では満足できない。どの道かをはつきりさせなければならぬはずである。

(以後、宗務院発行の教セン・ポスターについて議論)

九月八日(第二日)

三田村師の「報恩生活のすすめ」をテキストとして細部にわたる討論。(この討論の結果は後に発行される報恩のテキストに表われているはずである。)

座長 恩とは何か。恩に報いたことは。あなたは恩

を如何に感ずるか。宗祖の報恩は如何にあるべきか。実践面での指針。以上をテーマに話し合
つて欲しい。

。恵み・いつくしみ、自分以外の一切のものから
助けられて生きていくということを知る心

。衣食住に対する感謝

。合掌の姿こそ報恩である。

。合掌は感応の姿。合掌の心を伝えるべきである

。感じる恩と考える恩がある。どちらも生活体験
の中からでてくるものである。

。原爆被災者に接して自分の健康の有難さを知つ
た。

。どもりを直すのに苦労した。恩を忘れることは

できなす。

- 受持即化他である。三業に題目を唱えることが化他につながる。これこそ宗祖への報恩行である。
 - そのためには宗祖を知り宗祖を知らせることが一番である。
 - 報恩教化の実践は日常の法事・葬儀を大切にしなければならぬ。法事・葬儀・行事の中に報恩の理念を徹底させていくことである。
 - お会式を各寺でもっと盛大にすべきである。お会式を中心とした寺の活動にならなければならぬ。
 - お会式は教師の教化活動の採点の場である。
 - やはり報恩の教材が必要である。
- 以上の討議の中から、宗門への要望書がまとめられた。

第一分科会 要望書

過去四年間にわたり、この中央教化研究会で、宗祖七百遠忌をめざして「報恩」をテーマに、活発な討議が積み重ねられてきましたが、その成果を現代社会に展開し、報恩布教活動のみのあるものにするため、

- 一、日蓮聖人の報恩の理念を正しく伝える。今までの成果を盛り込んだ報恩論文集の出版
 - 一、檀信徒・未信徒への報恩教化のため、「報恩生活のすすめ」のパンフレット、並びに報恩生活のしおりのような教材の出版。
- 右要望致します。

昭和五十二年九月八日

中央教研 第一分科会

宗務総長殿